

編 集 後 記

編集委員としていよいよ最後の年になりました。編集を通して逆に多くのことを学ぶことができ感謝しております。この約5年の間に外科そして地方医療を取り巻く環境は大きく変貌したと痛感しています。特に外科は厳しいため外科に入局する若い医者の激減、すなわち“外科離れ”が囁かれてきましたが、拍車をかけるように新臨床研修制度が導入されました。卒後2年間に多くの科を回り勉強することは有意義だと思いますが、その反面、外科のように激務が要求される科は敬遠される傾向が顕著になったように感じられます。中には外科を専攻し手術をマスターして病人を救いたいという無償な献身的な気持ちを持った人もいます。しかし、実際にはそういう人は少ないのが現実です。その結果、地方病院からは医者が派遣大学に引き戻されることになり、地方の医者不足が深刻な問題となっています。“外科離れ”を防止するうえで外科そのものの魅力を卒後研修中の医者に理解してもらうことが肝要であることは事実ですが、外科医の激務に見合った経済的にも補償される制度の導入が必要ではないかと考えています。

さて、このように急変する医療環境の中にあつて消化器外科学会雑誌の編集方針も時代の流れに沿い変わってきていると思います。第一に個人情報保護の徹底、第二に文献検索の方法(インターネットを含む)の明示、第三に病理医への配慮、などが挙げられます。消化器外科の魅力を最大限伝える大きな責務を担う本学会誌はますます改善され質の高いものになると確信しております。しかし、どうすれば“消化器外科離れ”に歯止めをかけることに貢献できるでしょうか。そのためには質の高い論文を掲載するとともに投稿しやすい雑誌であることが肝要でしょう。最近特に英文雑誌志向が強い中で質の高い和文論文を集めることは大変ですが、質の高い論文を掲載することにより雑誌のレベルを向上させ、さらに、その結果投稿論文数を増加させ、消化器外科への関心を増すことに繋がると考えられます。また良い雑誌を作っても読まれなければ仕方ありません。是非各施設の指導者の先生におかれましては本雑誌を若手および消化器外科専門医を目指す医師の指導に活用し、消化器外科の面白さを広めて頂きたいと思います。編集する側も読む側も努力して雑誌の価値を高めることが消化器外科の魅力を伝えることになるに違いありません。編集委員として残された期間を少しでも雑誌の質の向上に繋がればとの思いで査読したいと考えています。